

# また会える (3)

## また会える

竹澤さおり

(前号から)

主人は毎日お線香をあげるようになりましたが、私は主人に言われたらしぶしぶあげるといふ毎日でした。でも、無理やりでもお仏壇の前に座るたびに、せっかく雅人を思いながらすることなんだから、その意味を正しく知りたい、そのためにたまにはお寺に足を運び法話などを聞いた方がいいのかなと、少しずつ思うようになっていきました。

ある日主人がお仏壇に手を合わせていると、当時一歳一ヶ月だった娘が真似をして、小さな手を合わせていました。その姿を見て、涙が止まりませんでした。たとえ真似であっても、心から手を合わせてい

る娘の姿に、私の方がしつかりやらなければいけないのに、と、思いました。娘はお仏壇からリーンと聞こえると反応して、お仏壇の方を向き一緒に手を合わせて頭を下げるようになってくれました。

お仏壇をおいてから数カ月がたったころには、毎日必ず夕食の前にみんなで順番にお仏壇の前に座り、お線香をあげ手を合わせるようになっていました。私はそんな毎日の中で、あらためて何のために手を合わせるのかをちゃんと理解しようと思うようになり、農さんに相談したところある本をいただきました。

その本を読むと、以前から主人にも言われていたように、お仏壇の前では雅人に手を合わせるのではないかと、自分もお浄土にいけるようにと手を合わせているんだとわかりました。きっと、今までも法

要などで聞いていたとは思いますが、私に聞く気持ちが無かったからか心に届いていませんでした。

「雅人はお浄土にいる、私もお浄土に行きもう一度雅人に会おうんだ」そう思うようになり、心から手を合わせるこゝとができるようになっていきました。

二〇一四年の七月には、本願寺で震災体験をお話する機会をいただきました。雅人は三回忌法要の時に「浄雅」という法名をいただいていたのですが、私たちもこの機会に帰敬式を受け、法名をいただくことになりました。主人は「雅徳」私は「妙雅」、そして娘は「雅香」という法名をいただきました。このこと



は、お浄土でまた雅人に会えるという気持ちを大きくしてくれ、また、娘ともいつかお別れする日が来ても、お浄土で会おうねと言える自分にしてくれました。

その頃には娘も、「だぶつまつと(なもあみだぶつまつと)」と言いなながら手を合わせるようになり、私も少しですが心に余裕ができ、娘の成長も感じながら毎日手を合わせることもできるようになっていきました。

今では娘も、雅人お兄ちゃんはお浄土にいて、次にパパやママがお浄土に行って、そのずつとあとに自分もお浄土に行くから、またみんなで家族四人で会えるんだという時があります。また、「ママ！リンリンした！」と言い、自分からお仏壇の前に行き手を合わせることも多くなりました。

「また会える」このことは、私たちが生きていく上で大きな支えとなっています。

(次号につづく)

# 法語の世界

## 《原文》

前々住上人(蓮如)仰せられ候ふ。御本寺・御坊をば聖人(親鸞)御存生の時のやうに思し召され候ふ。御自身は、御留守を当座御沙汰候ふ。しかれども御恩を御忘れ候ふことはなく候ふと、御齋の御法談に仰せられ候ひき。御齋を御受用候ふあひだにも、すこしも御忘れ候ふことは御入りなきと仰せられ候ふ。  
(『蓮如上人御一代記聞書』 二百二十)

## 《現代語訳》

蓮如上人は、「山科の本願寺や大坂などの御坊のことは、親鸞聖人がご在世の時と同じように考えている。つまりこのわたしは、しばらくの間、聖人の留守をお預かりしているだけなのである。そういうことではあるが、聖人のご恩をかたときも忘れたことはない」と、お齋の折のご法話で仰せになりました。そして、「お齋をいただいている間も、少しもご恩を忘れることはない」と仰せになりました。

## 高千穂組仏教夏季講座開催のお知らせ

とき 七月二十二日(日)  
ところ 五ヶ瀬町桑野内 光照寺  
講師 浄土真宗本願寺派布教使

熊本教区飽田組浄行寺住職

盛 忍 師

その他 金光寺から六人参加予定です。  
参加希望の方は金光寺へお申込み下さい。  
念珠・門徒式章、お経本が必要です。

